

わたしたちのおもい

こねっくの日課や過ごし方は、保育所や幼稚園とよく似たものになっているかと思いません。しかし、こねっくと保育所や幼稚園とでは集団の大きさも違いますし、プログラムの目的も異なります。

少人数（5～6名）のグループや、先生と1対1の関係の中で過ごすことで、大きな集団の中では見えなかったこと、例えば、「子どもがどんなことに困っているのか」「子どもには世の中がどんなふうに理解されているのか」「どんなサポートがあればより生活しやすくなるのか」などが見えてきます。

見えてきたものを、保護者の方と一緒に深めていけるのがこねっくです。こねっくでわかったことは、お母さんやお父さんがお家でお子さんに関わる時のヒントにさせていただけますし、保育所や幼稚園でも活かしてもらえます。

こねっくは、集団参加への力を伸ばしたり、読み書きする力をつけたり、体操の技術を上達させたりすることなどを、第一の目標にしているわけではありません。私たちが大切にしているのは、しっかりとした発達の「土台」づくりです。

ここでいう発達の「土台」とは、子ども自身の「自分を好き」という気持ちです。

子どもたちが生きていく中で「僕なんて、私なんて、どうせできないもん」とか「自分がキライ」と思うようになってしまうのは、とても残念なことです。

よく「子どもは『失敗』から学ぶ」と言われます。それも発達にとって大切な視点ですが、多すぎる失敗体験や大人からの注意・叱責は、子どもの自信を奪います。すると、子どもは「できなかったけど、今度はがんばってみよう」と自分を励ませなくなります。「できた！ やった！ もっとやってみよう！」と思える成功体験を積むことが、「自分を好き」と実感できる近道です。

成功体験のポイントとなるのは、「3つの『わかる』」です。

1つめは「自分をとりまく環境がわかる」です。

それは例えば、自分の周りでどんなことが起こっているのか、自分は何を指示されているのかが「わかる」ということです。私たちも外国に行った時に知らない土地や言語の中で生活することはとても不安だと思えます。何を指示されているのか、いま何をすべきなのかがわかれば、子どもは安心して過ごせます。こねっくでは、話しことばだけでは意味が通じにくい子どもには、絵や写真で伝えるなどの個々に合わせた工夫で、子どもに「わかる」環境を提供しています。

2 つめは「人が安心だということがわかる」です。

子どもが他人と信頼関係を築いていくには、相手が自分のことを「おびやかさない」「安心できる」と感じられる必要があります。周囲に対して「自分のやりたいことを認めてくれない」「自分に嫌なことばかりする」というイメージが強まると、次第に「人」全般に向けて不安感や不信感を抱くようになってしまうかもしれません。こねっくでは、まずスタッフが子どもにとって安心できる存在となることから出発します。そして、子どもたちが「人って、いいものだな」と思い、「この人と一緒に遊びたい」「この人なら僕の気持ちを言っても良い」と感じられる相手を増やしていけるようにしたいと考えます。

3 つめは「自分のからだがわかる」です。

こねっくに通う子どもたちの中には、自分の体をどんな風に動かせばどんなことができるのか、例えば、どれくらい体を曲げればどれくらいジャンプできるのか、を実感しにくい子がいます。また、人がたくさんいて体が触れ合うような場所や騒がしい場所がとても辛い子や、じっと座っていることが苦手な子などもあります。そんな子どもたちは、自分のからだの使い方や感じ方を知ることで思うような動きができるようになったり、からだが楽になるためのコツをつかんで生活しやすくなったりします。

このような「3つの『わかる』」を基盤として、子どもたちは意欲や達成感を得ていきます。また、「こわいけど、この先生やお友達の中ならちょっと頑張ってみよう」と挑戦する気持ちや、「できたよ！見て、先生！」と自分をアピールしたり相手と共感したりする気持ちも育まれます。このような自信こそが、子どもの発達の「土台」です。

ただ、この「土台」の作り方はみんな同じではありません。豊かな「土台」は、子どもたち一人ひとりの「感じ方」や「理解の仕方」に合わせて作られるものです。そのためにも、こねっくは一人ひとりの違いを見極められる様々な検査や日々の療育実践を行っています。

2013年1月